

ARIA The NAVIGATIONE  
異世界に転生して麗し  
の水先案内人と過ごす  
スローライフ♡

neo venetiatti

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ARIA The NAVIGATION 異世界に転生して麗しの水先案内人と過ごすスローライフ♡

オツチヨコチヨイな女神のとんだ勘違いで転生することになったおれ。しかしそこは見たことも聞いたこともないネオ・ヴェネツィアという未来都市だった。そんなところで第二の人生をおくることになったのだが、それは麗しの水先案内人ウンディーネたちと過ごす幸せに満ちたスローライフの始まりだった！

# 目次

- |     |              |    |
|-----|--------------|----|
| 第1話 | 勘違い女神と偶然の奇跡  | 2  |
| 第2話 | 妖精の後輩たちとの出会い | 21 |
| 第3話 | 水先案内人トリオ     | 34 |
| 第4話 | 気さくなアリア社長    | 48 |
| 第5話 | こじらせたシングルたち  | 64 |





## 第1話 勘違い女神と偶然の奇跡

溺れていた。

間違いない、おれは溺れていた。

どこにも掴めるところがなく、身体はいうことがきかない。

あらゆる方向へと回転してしまい、上下左右ともがきまくっていた。

だが、そんな状況の中であることに気がついた。

ひとつの方向から光が差し込んでいた。

おれは必死にその光を目指して泳いだ。

人が見たら泳いでいるようには見えなかったろうが・・・

それだけ、とにかく必死だった。

その甲斐あつてか、少しずつ光の方に近づいているようだった。

すると、誰かが語りかけるような声が聞こえてきた。

とても優しいような、慈悲深いその声に導かれるように、その光の方向に向かって進ん

でいった。

そしてついに水面から顔を出すことに成功した。

必死になって水面に飛び出した。

苦しい状況の中、その先にほんやりとだが女性がひとり、なんだか豪華な造りの椅子に座り、脚を組んだ膝の上で頬杖をついて、こちらを見ているのがわかった。

いや、眺めていた。

「あらあら、大丈夫？」

「ゲホツゲホツ」

「少し落ち着いたかしら？」

「いや、この状況を見れば、わかると思いますが……ゲホツゲホツ」

「そうなのね。じゃあ少し待ちましょうか？」

とぼけているのか？

それともおちよくっているのか？

まるでこの世に生きてるように思えない、現実感の乏しい話し方。

というか、目の前の状況を見て、なんでそんなに落ち着いているんだ？

こっちは、さつきまで溺れる寸前だったというのに。

「もう落ち着いた？」

「落ち着いたところまではいきませんが、まあ、なんとか……」

「それはよかったわ」

その目の前の女性はふわりと浮かんだシースルーの衣を身にまとっていた。

そう。それはまるで天女の羽衣という表現がピッタリだった。

金色に輝く長い髪が、その美貌をいつそう引き立てている。

その美貌の持ち主は、優雅に脚を組み換えると、少しため息をもらした。

「それでね、早速なんだけど」

「あゝ」

「ん？なんなのかしら？」

「話の腰を折って申し訳ないのですが」

「いいわよ。どうぞ」

「とりあえずこの状況を説明してほしいわけなんですけど」

「あら？そうだった？」

「そうなんです！今さっき、水の中から出てきたところなんです！しかも、濡れそうだったんですよー！」

「まあ、それは大変だったわね」

「大変すぎますー！」

「生きていれば、そんなこともあるものよ♡」

「こんなこと、そうちよくちよくはありませんよ？」



「そうなの？」

「そうです！少なくともおれの人生では！」

すると、その美貌の主は何かを思い出したように、はたと何かに気づいた表情に変わった。

「ごめんなさい。わたし、訂正しなければならぬことを思い出したの」

「訂正？」

「そうなの。言っていない？」

「べつにいいですけど」

「生きていればそんなこともあるって言ったのだけど、実はあなた、もう死んでるの」

実にあっさりしていた。

人がひとり死んでいることを告げるのに、こつこつとあっさりという人を、これまでの人生で見たことがない。

いったいなんなんだ？この人は！

だが、ふと思つた。

このシチュエーションは、これまでに何度か見たことある気がする。

アニメだとかラノベだとかで、よく出てくるシーン。

もし、おれの直感がそれを告げているのなら、目の前にいる人は人ではないはず……

「死んでるって、どういうことなんですか？」

「言葉の通りよ。お前はもう死んでいる！」

自分で言っておきながら、顔を赤らめていた。

「エ、エヘン！」

咳でごまかそうとしていた。

でもなんだか、ちよつとかわいい。

「覚えてないの？」

「だって、いきなり死んでるって言われても」

「それはそうねえ。いきなりだったものねえ」

「いきなりだったんですか？おれが死んだのって」

「そうねえ。たまたま」

「た、たまたま？」

「悪い偶然が重なってしまったのね」

絶句してしまった。

突然死んだと聞かされ、その上悪い偶然が重なったと。

しかも、たまたまだと？

いつた、たまたま重なる悪い偶然でなんなんだ？

おれの人生で、そんなことで終わりを告げたというのか？

「ごめんなさい。謝罪します」

「えっ？ どういうことですか？ なんであなたが謝らなきゃならないんですか？」

「だって、手違いで・・・」

「て、手違い？」

聞き捨てならない言葉が出てきた。

「大体あなたは誰なんですか？ さつきから死んだの手違いだの、人の人生を弄ぶような

ことを言ってー！」

「弄ぶなんて、人聞きの悪いこと言うのはよくないわよ」

「言っているのはあなたの方でしょ？」

その女性は、少し斜め上の方に視線を向けた。

「そんなこと、私が言うなんてこと・・・ホンマや！」

開いた口がふさがらないとは、上手く表現した人がいたもんだ。

「一度言ってみたかったの♡」

その美しい顔がともはにかんでいた。

「ちなみに、満足されたんですか？」

「ウフフフ」

「笑ってるよ、この人」

だが、その女性はこれまた予想通りといえるような言葉を、何事もなかったように不意に口にした。

「私は女神アリシアーネといいます」

「女神って・・・」

「意外でした？」

「ちよつと予想してたようなどころはありますけど」

「ええー？ そうなのー？ それはちよつとシヨック」

「あつ、いえ、そのく、そんなことないような・・・」

なんでこつちが気を使わなければいけないんだ？

そう思いながらも、なぜかそう言いたくなってしまったわけなんだが・・・

「つまり、あなたはこれまでいた世界で最後の時を迎えた。そういうことになるわ」

「ということとは、ここは天国？」

「だとよかったわね」

「じゃあ地獄なんですか？」

「というわけでもないの」

「はあ？」

掴み所のない話だ！まったく！

「ねえ」

「なんですか？」

「なんか顔が怖いんだけど」

「そりやそうなりますよ！」

「でも、もうちよつと付き合つてね。これからが大事なところだから」

「わかりましたよ」

彼女、女神アリシアーネはこう言った。

「あなたはサン・マルコ広場の大鐘楼から、頭から真つ逆さまに転落したの」

ちよつと待つてくれ。

なんでそんなところからおれが？しかも頭から真つ逆さま？

「覚えてないの？」

「はい」

「ホントに？」

「ええ」

「おかしいわねえ」

女神アリシアーネは、考える人のポーズそのままに頭をかしげていた。

「ほら、あなた、先輩のことが好きだったでしょ？」

「ほらと言われても・・・」

先輩という言葉を目にした瞬間、突然記憶が甦ってきた。

そして、正に糸を手繰り寄せるように、次々と過去の記憶が甦ってくる。

まさに走馬灯のように。

「ね？」

納得したように女神アリシアーネは、その美しい顔に優しく慈悲深い微笑を浮かべた。

「でも今から考えても、やっぱり変よね？」

「はあ？」

「だって、あなた、なんであんなところにいたの？」

「なんでって言われても・・・」

「ホントに覚えてないの？」

「なんとなく思い出してきたようなんですけど」

「そういうところよね？」

「えっ？」

「だから、そういうところがあるから、こんなことになったんじゃない？」

「おれのせいだつていうんですか？」

「あなたのそういう優柔不断なところが、こういう事態を招いたんだわ」

「なんかこの人、だんだん印象が変わってきた」

「なに？」

アリシアアーネは、どう見ても不服そうな顔になっていた。

さつきまではすまなさそうにしてたのに・・・

「私ね、これまでミスをしたことがなくて有名だったの」

「そうなんですか」

「なのに今回ついにやっちゃってしまったわ」

「それはご愁傷様で」

「どうしてくれるの？」

「そう言われてもおれには関係が・・・」

「ないの？」

「あるんですか？」

そう言うのと今度は、シユンとしてしまった。

「仕方がないわ。起こったことは起こったこと」

「結構割りきりが早いんですね」

「そうかもね。だから」

「だから？」

「だからってつとり早く終わらせましょう」

アリシアーネはキリツと表情を変えた。

「あなた、ヴェネツィアが好きなの？どうなの？とりあえずそこをハッキリとさせておきましょう」

「あ、あのですね？さつきから聞いてると、アリシアーネさんが一方的に話してるだけで、結局ちゃんとした説明をしてもらってない気がしますよ？」

アリシアーネはわざとらしいくらい、大きなため息をついた。

「なんか、こつちが悪いみたいに感じてしまう。」

「おかしい。」

「しょうがない子ね」

「子？」

「ちゃんと聞いているのよ」

「わかりましたよ」

納得いかない展開だが、いい加減早く終わらせたい気分になってきていた。

「こんな人、いや、こんな女神に付き合っていてどうなるんだろうと。」



「あなたはね、ヴェネツィアの大鐘楼から真つ逆さまに頭から落ちたの」

「それは聞きました」

「なぜだと思う？」

「だからそれをですわね？」

「あなたが片思いをしていた先輩からもらったペンダントを落としたからなの」

ペンダント。

そう言えばそんなことがあったような・・・

「サン・ジオルジョ・マツジヨール島を最上階の展望室の窓からからぼんやりと眺めていたまさにその時、あの大きな鐘楼が鳴り始めた！」

あつ！確かにそんな感じだったような・・・

「それに驚いたあなたは、手に持っていたペンダントを空中高く放り投げた！」

えつと、そうだったかなあ・・・

「それが運悪く、落下防止の金網の隙間から外へと飛び出した！」

落下防止の・・・

「普通ね？落ちないようにと落下防止の金網つてあるのよ？そこでなんで落とすの？どういうことかしら？ねえ？教えてくれる？」

思い出した。

いきなり鐘楼が鳴り出して、あまりの大きな音にビックリしたっけ。

「すみません」

「今さら謝ってもらっても仕方がないわ。問題はその後よ。あなた、その金網を突き破って外に出ようとしたでしょ？なんでそんな無茶なことしたの？」

そこは覚えてなかった。

突き破った？金網を？そんなバカな・・・

「ちようど老朽化がひどくて、変えないといけないうタイミングだったとしてもよ？」

あれ？

ちよつと待て。

「それって、おれの責任じゃないですよね？間違はなく、そこを管理しているところの責任ですよね？」

「あなたがそのタイミングでそこにいて、大事なペンダントを放り投げたりするからよ」  
屁理屈もいいとこだ。

こいつ、ホントに女神なのか？

なんか怪しい。

「だけど、その時に聞こえたの」

「聞こえた？何がですか？」

「あなたの心の声」

「心の声ってなんなんですか？神通力か何かなんですか？」

「違うわ。あなたはこう言ったの。神様女神様あ〜！どうか助けてえ〜！って」

「そんなこと言ったのか・・・」

「あなた、大体なぜヴェネツィアへ行ったか覚えてないんでしょ？」

「まあ、そうですねえ」

「あなたが好きだった先輩が、ヴェネツィアのファンだったからでしょ？だから一度そこへ行ってみたいとなったわけじゃない？」

「そんな理由だったのか・・・」

「だから、勘違いしてしまっただでしょ？」

「えっと、それはそういう・・・」

アリシアーネさん？

なんかさつきまでの威勢の良さはどうなったんですか？

「勘違いとおっしゃいますと？」

「だからあく先輩大好きいー！という気持ちをへヴェネツィアのこと大好きいー！と聞き間違えたの！」

「はあ？」

「いったいこの人は、いや、この女神は何を言っているんだ？」

「だつてしょうがないじゃない？命を投げうつてもそこまで思い詰めてるなんて、この女神アリシアーネとしては放っておけるわけじゃないでしょ？」

アリシアーネは、少し頬を赤くしながら言つてのけた。

おれはといえば、ため息をつくしかなかった。

「つまり、アリシアーネさんが勘違いしたことで、おれは命拾いしたことですか？」

「まあそうとも言うかしら？」

アリシアーネはにっこりと微笑んだ。

「でも死んだのよ？あなたも勘違いしないでね♡」

なんか一気に力が抜けてしまった。

「それでこれからどうなるんですか？」

「そこなの」

「で？」

「もう手続きしちやつたの」

「なにをですか？」

「転生手続き」

「転生手続き?」

「だってそこまでヴェネツィアに恋い焦がれていた人を、ヴェネツィアを見守り続けた女神として放っておけなかった」

「違いますよね?」

「そこはおいおいと」

「わかりました!それで?!

「それでね、あなたにうってつけの場所があるの。是非そこを第二の人生を過ごす場所にすればいいんじゃないかと思って」

「どこなんですか?」

「ネオ・ヴェネツィア」

「ネオ?ヴェネツィア?なんですか、それ?」

「未来のヴェネツィアなの」

「未来って、将来そういう名前になるんですか?」

「違うわ」

「違うって?」

「アクアのヴェネツィア。そこがネオ・ヴェネツィア」

「アクア?」

「惑星アクアよ。火星を大改造してテラフォーミングした、人類の叡知がつまった水の惑星。それがアクア」

「火星って、まさかあの火星?」

「他に火星ってあったかしら?」

「やっぱりこの女神は大丈夫なのか?」

いきなり火星だと?

しかもヴェネツィアにネオなんてつけたりして・・・

マンガの読みすぎか?それともラノベか?

ファンタジーにも程がある。

「そこには私のかわいい後輩たちがいるから、一度訪ねてみるといいわ。なんだったら色々と相談してみるのもいいかもね」

「はいはい。わかりました」

「ふーん」

「なんですか?」

「その感じだと信じてないわね?」

「まあ」

「じゃあ元に戻る?」

アリシアアーネがそう言った途端、おれは大鐘楼から真つ逆さまに落ちている真つ最中になつていた。

「わかりました！」

「よかつたわ。わかつて頂けて」

目を開けると、また元の場所に戻つていた。

「偶然とはいえ、あなたはもう一度人生をやり直すチャンスを与えられることになった。それを生かささない手はないわ。でしょ？」

「確かにそうとも言えます。本当はあそこで死んでいたんなら、ありがたい話です」  
「そうよね？じゃあこのおまじないを唱えて？」

「おまじない？」

女神ウンディーネの手には、長く金色に輝く船をこぐオールのような長い棒が現れた。

そして目を閉じると、こっくり始めた。

「ムラーノ、ブラーノ、フローリアン！」

「な、なんですつて？」

「言わないの？」

優しい笑顔の向こうに抵抗できない圧を感じた。

「わかりました！言えばいいんですね？」

「そうよ。人は素直なのが一番よ」

「僕はまだ人なんですわね」

「細かいことはいいから」

「は、はい！」

えーいっ！

どうにでもなれ！

こなったら、そのネオ・ヴェネツィアつてのを見てみようじゃないか！

「ムラーノ、ブラーノ、フローリアンっ！」

「よく出来ました♡」

「ちよつと！なんでアリシアーネさんは言わないんですか？」

女神アリシアーネは、ちよつと頬をピンク色に染めた。

「だって、恥ずかしいじゃない？」

その言葉が最後だった。

目を覚ましたおれは、その街に再び降り立った。

いや、それは勘違いだった。

そこは来たことのあるヴェネツィアとはそっくりだったが、まったく違う街だった。



## 第2話 妖精の後輩たちとの出会い

なんだかとても気持ちよかった。

ふわりと浮かんでいるようで、それでいてゆらゆら揺られているようだった。

赤ちやんて、もしかしてお母さんのお腹の中ではこんな気持ちなんだろうかと、ふと頭の中をよぎっていた。

うつすらと目を開けてみた。

そこで今まで眠っていたことによく気がついた。

なんだったら、しばらくはこのままでもいいかなんて気持ちにもなっていた。

青い空とほつきり浮かんだ白い雲。

心地いいそよ風がどこまでも流れていくようだった。

揺られていると感じたのは、舟の上にいるからだとわかった。

水が舟に当たると音だけが聞こえている。

でもなんでこんなことに？

そう思ったが、すぐに撤回した。

しばらくはそんなことを考えたくないくらい心地よさだった。

だがそんな心地よきは、騒がしい声たちによっていきなり遮られてしまった。

どこからか女の子たちの賑やかな会話が聞こえてきた。

「あわわわわあー!」

「あのねえ、あんたはいつたいどんだけセリフの中に“わ”を入れたら気がすむの?」

「でっかい狼狽です」

確かに誰かが言った狼狽という言葉の通り、なんか相当焦っている様子が伺えた。

ひとりだけの様なのだが・・・

「どうしよう〜〜藍華ちゃ〜ん!」

「だからいつも言ってるでしょ? ウンディーネたるもの、最後の最後までちゃんと仕事をしておそ一人前だって」

「灯里先輩? 昨晩はちゃんと確認したんですか?」

「したはずなんだけど・・・」

「したはずってねえ、あんたはいつもながら、どうしてそうなの?」

三人の会話みたいだ。

中のひとりは、なんだかとても困っているのだろうと理解できた。

だが、あとのふたりはなぜかそれに反して冷静な感じだった。

というより、いつものことだと言いたげな、呆れた様子に聞こえた。気になってきた。

いったいどんな女の子たちなんだろう。

少し頭をもたげてチラッと覗いてみた。

彼女たちは、ここから少し離れた先にある建物のところにいた。

いや違った。

その建物は、まるで水の上に浮かんでいるようだった。

左右に長く続く海岸線から海に突き出たところに、その小さな建物はあった。

ん？海岸線？海？

そうだ。おれは海に浮かんだ舟の上で揺られていたわけだ。

それをわかった途端、急に不安になってきた。

さつきまで溺れていたような感覚が不意に甦ってきたからだ。

だが、一方で賑やかに会話している女の子たちのことも気になっていた。

いったいこの状況はなんなんだろうか。

何が自分に起こっているのかを知る必要もあった。

「でも藍華先輩？これちよつと見てください」

「何よ後輩ちゃん？なんかあった？」

「ほら、これです」

「ん？ぬな？」

建物の前には小さい船着き場があり、そこには一艘のゴンドラが留まっていた。

そのゴンドラの少し隣で、緑色した長い髪の少女がしゃがみこんでいた。

そしてそのそばでは、青い髪をショートにした女の子が両手を腰に据えて、不思議そうに覗き込んでいる。

問題のもうひとりとは、デッキの上で口をだらしなく大きく開け、冷や汗をかきまくって、どうしたらいいのかと困った表情で、まさに焦りまくっていた。

「このロープの切れ具合だと、何か金属片のようなものがぶつかって切れたんじゃないでしょうか？」

「確かにそうね。後輩ちゃんの言う通りだわ。以前にもあったわよね」

「はい。灯里先輩のゴンドラが流されて、それに気がついたアリア社長がすぐに知らせてくれて、そしてアリシアさんが回収に向かいました」

「そして今回も・・・」

話していた二人が、デッキの上で放心状態のピンク色の髪の女の子に目を向けた。

「ええ？何い？？」

「何じゃないでしょ？またやらかしたのよ？しかも今度はアリシアさん専用のゴンドラ

よ？もしなくなつてたらどうするつもりだったの？」

「うゝゝん」

「尋常じゃない困り方ですよ、灯里先輩のあの表情」

「はあゝゝ」

「どうやら一番年上らしいシヨートカットの女の子が、その場で大きなため息をついていた。」

「今さらこんなことで時間を取っていてもしょうがないわ。流されてしまわないうちに、アリシアさんのゴンドラを回収しておきましょう」

「それが先決ですね」

「ごめんね、藍華ちゃん、アリスちゃん」

「デッキの下の船着き場のところにいた、藍華、そしてアリスと呼ばれたふたりが、そこにあつた黒色のゴンドラに乗り込もうとした。」

「灯里いー！」

「何いゝ？」

「あんたが漕ぐのっ！」

「はひっ！」

「デッキのところに行った、とぼけた顔の、灯里と呼ばれた女の子は、急いでゴンドラの

ところまでかけ下りてきた。

彼女たちが乗り込んだゴンドラは、その言葉の通りゴンドラを回収するべく動き始めた。

回収。

で、こちらに向かってきている。

改めて自分が乗っている舟を見てみた。

それはまさしくゴンドラの形状をしていた。

ということは・・・

「灯里いっ！もつとしつかり漕ぐのよっ！」

「わかったあー！」

おれはとっさに隠れようとしていた。

だがそんなこと、すぐに意味がないことにも気がついた。

じゃあどうするんだ？

賑やかな声たちがどんどん近づいてくる。

「ぶつからないように、ゆっくり近づけてよ」

「代わりましょうか、灯里先輩？」

「大丈夫。なんとかガンバる」

彼女たちの声がいよいよ間近に迫ってきた。

もうどうすることもできない。

腹をくぐることにしたおれは、ゴンドラの上でひとり、青空を見上げながら笑顔の練習を開始した。

だが突然、「ドンツ」とぶつかった音とショックで思わず声を上げてしまった。

「アウツ」

「だから言ったでしょ？近づいたら気をつけてって……」

「藍華先輩？なんか変な声が……」

「藍華ちゃん？お腹の具合でも悪いの？」

そんな声が聞こえたかと思うと、少しの沈黙が流れた。

「気まずい。」

明らかに気まずい空気が流れていた。

「どうする？」

「どうするんだ？」

「藍華ちゃん？どうかした？」

「どうしたって、あんた、聞こえなかったの？」

「藍華ちゃんのお腹の音ならさつき……」

「そんな音、鳴るわけないでしょ！」

もうごまかすことはできなさそうだった。

ここは意を決して出るしかあるまい。

「そうじゃないなら……もしかして……藍華ちゃん……こんなところで……まさか……出ちゃったの？」

そのとぼけた女の子は、そう言ってクスクス笑い始めた。

「ちよつと！灯里！・よりもよつてこんな時に何言ってるの！」

「そうですねよ！人の声をオナラ呼ばわりするなんて失礼な！」

思わず反応してしまった。

第一声がオナラかと非難するセリフになろうとは思ってもみなかった。

まさに不可抗力。

だが、そんなことを言ってる場合じゃない。

今のセリフで、彼女たちを完全に引かせてしまったに違いない。

「藍華先輩？ゴンドラに誰かいますよ？」

「確かに誰かいる」

「えっ？いるの？だれ？」

もう観念するしかなかった。



ただこの場合、どうやって説明するかだ。気がついたら、ゴンドラの上にいました。

そんなのが通用するとも思えない。

だって自分でもはつきりしない。

確か、どこかへ行くように説得されたまでは覚えている。

あれはなんだったつけ？

変に浮わった女の人が目の前に現れて、手違いがどうのこうのと・・・

「誰かいるんですか？」

一番年上という印象の藍華という女の子が訪ねてきた。

「藍華先輩？ここはやはりネオ・ヴェネツィア警察に通報したほうがいいのでは？」

ネオ・・・ヴェネツィア・・・

そうだ。それだ。

あの時、あのふんわりとした衣装に身を包んだ女性に言われたんだっけ。

第二の人生を送るのにちょうどいい場所。

そう、確かに言った。

ネオ・ヴェネツィア。

「警察に通報って言っても、変に騒ぎを大きくするだけだし。こんな時、アリシアさん

だったらうまく納めるんでしょうけど……」

アリシア……

聞き覚えのある名前だ。

ん？待てよ？

アリシア……アリシア……アリシア……

そうだ！

女神アリシアーネ！

その人が言ったんだった！

「怪しいものじゃないんです。おれ、そのアリシアーネさんに言われたんですよ。ネオ・

ヴェネツィアへ行けて」

ゴンドラのへりから少し顔を出して話かけていた。

「うわっ！やっぱり誰かいたっ！」

「先輩！通報です！」

失敗した。

思い出した言葉に頼ろうとしたのが間違いだった。

そりやそうだ。

いきなりおれは何を言い出したんだ？

「アリシアアーネさん？誰それ？」

でもひとりだけ違うリアクションの人がいた。

というか、この場でこんなリアクションをしてくれるひとがいてくれる。

それって、女神様と言いたいくらいだ。

「灯里！こんな人と口聞いちやダメよ！アリシアさんのゴンドラを盗もうとした極悪人よ！」

「そうです！目を合わせると、変なものがうつりますよ！」

はあ？うつる？

このアリスと呼ばれた少女は、口調は丁寧なのに、言うことがキツイ。

いったいおれが何をうつすというんだ？

「おれは病気でもなんでもありません。だからみんなに何かうつしたりもしませんか」

「この人、なんか変なこと言ってる！」

いや、言い出したのはそっちなんですけど・・・

「でも、さつき言ってたアリシアアーネさんて誰のことなんですか？」

よくぞ聞いてくれました！

すつとぼけた女の子だと思ってたこと、撤回します！

「そんなこと聞いてどうするの？ 灯里？」

「だって、なんかアリシアさんと関係があるのかと思ったから」

「アリシアさん？」

その藍華、アリス、そして灯里の三人は、じつとこちらを見つめてきた。

見つめられたおれはというと、どうしようかと迷ってしまった。

答え方のよつては、どうなるかわからんからだ。

「いえ、あのお、そのお、どう言ったらいいか……」

「通報おー！」

「了解です！ 藍華先輩！」

「ちよ、ちよつと待ってください！」

「じゃあ正直に言いなさいよ！」

「そうですよ！」

藍華は灯里からオールをもぎ取ると、こちらに向かってグイツと構えた。

「さあ、どうするんですか？」

別に本当のことを話すことに、些かの問題もなかった。

ただ、どう話したところで納得してもらえそうになかった。

「で、ですからあ、そのアリシアーネ……い、いや、そのアリシアさんという方に言わ

れたんです！困ったら私の後輩たちに相談すればいいって！」

とにかく言ってみた。

言われたのは本当だ。

嘘偽りのない真実だ！

「お宅、アリシアさんとお知り合いなんですか？」

さつきまでオールを威勢よく構えていた藍華の態度が変わった。

彼女たちは、どうやら本当にアリシアーネ、い、いや、アリシアという人の後輩たちのようだった。

あの疑わしかった、自分のことを女神だといった女性のいうことは、うそではなかったようだ。

それじゃあ、この目の前にいる女の子たちは、いったい誰なんだ？

女神の後輩？

なんですか、それって？

彼女たちが、もちろん女神の後輩たちではなく、本当は妖精の後輩たちであること気づくには、もう少し時間がかかりそうだった。

## 第3話 水先案内人トリオ

藍華は、一旦下ろしたオールをもう一度構え直した。

「やっぱり怪しいわよ。あんた、いったい何者？」

「何者と言われても・・・」

おれが会った女神アリシア・アネと、彼女たちがいうアリシアさんという人物とは、どうやら一致していないような気がした。

「アリシアさんの名前を出したらなんとかなるとか思ってるんでしょー？」

「熱烈なアリシア・ファンじゃないですか？」

「そうなの？あんた！そんなの、ファンていうの？」

「やはり、でっかい怪しいです」

怪しいのにでっかいとかあるの？

だいたいアリシア・ファンてなんなんだ？

「あのおのそのアリシアさんという方は、歌手か何かをされてるんでしょーか？」

「何を言ってるの？アリシアさんと言えば、水先案内業界を代表するウンディーネであ

り、水の三大妖精のひとりで、みんなの憧れの的で、きれいで優しく、観光案内からオールさばきひとつまで、すべてを完璧にこなすミス・パーフェクト！それが、あの、麗しの、アリシア・フローレンスでしょー?!」

この藍華という女の子の、アリシアさんを説明する熱がすごい。

でも、どれだけすごい人物なのかは、少しだが理解できた。

それと、どうやら彼女たちの様子から察するに、ゴンドラで観光案内をしている憧れの人物であり、彼女たちもそれを生業にしているということのようだ。

「つまり、そのアリシアさんもあなた方もいわゆる観光案内の仕事をしているということですか?」

「決まってるでしょ? 私たちのこの格好を見て、ウンディーネのほかになんに見えるって言うの?」

「そうですよねえ〜」

やはりそうなんだ。

ゴンドラに乗り、同じような制服に身を包んで、そしてウンディーネという職業の名前らしき言葉。

考えたら、そりやそうだ。

あんな現実感の乏しい女神と名乗るような人・・・いや女神がそのまんま存在してい

るなんておかしい。

「だいたい女神だと言ってるのも、あくまでも自己申告だ。

だが、今の自分の状況を考えたら納得せざるを得ないのも事実なんだけど・・・

「これにはいろいろと事情がありまして・・・」

「事情？ゴンドラ泥棒にどんな事情があるって言うの？」

藍華の勢いは収まりそうにない。

「どうやってこの状況から逃れるかだ。

まずはそれをどうするかなんだが・・・

「藍華ちゃん？なんか理由があるんじゃない？とてもお困りの様子だし・・・」

「あんたねえ、こんなところでお人好しパワーを発揮してどうするの？」

やはりここで頼りになるのは、こちらの「のんびり少女」の方だ。

「確か「灯里」という名前だっけ？」

「あのお灯里さん？」

「はい？わたし？」

「灯里さん・・・でいいんですよね？」

「はい、そうですよ」

「ああ良かった。先ほど灯里さんがおっしゃった通り、実はちよつと困ったことになっ



てまして」

「やっぱりそうだったんですね？」

その会話の横で、藍華が呆れたようにため息をついた。

「あのねえ、灯里？あんたはなんでそんなにさあ、簡単に親しくなるの？ちよつとは疑うということも必要よ？」

「でもやっぱりお困りみたいだよ？」

「だよ？って……」

藍華は構えていたオールをとりあえず下ろしてくれた。

だがその目はまだまだ疑いが晴れた訳じゃないと警戒心がすごかった。

「じゃあ言ってみなさいよ！とりあえず聞いてあげるわよ！」

「ここはひとまずもつともらしいことで切り抜けるしかあるまい。

「実は、ちよつと昨日の記憶がないと言いますか、気がついたらこんな状態だったと言いますか……」

「それって酔っぱらいってこと？」

「そ、そうなんです！酔っぱらいなんです！」

「つまり酔っぱらって、ゴンドラで寝てしまったってことなの？」

「そうなんです！」

酔っぱらいという言葉に飛びついてしまった。

言い訳としては成り立つかなと思っただけだが、まさかこれが後々になって面倒なことになるなんて思わなかった。

「だからって、アリシアさんのゴンドラに無断で乗っていいなんてことにはならないですからね！」

「それはその通りです。はい」

思わずため息が口から漏れ出た。

なんとかなりそうな雰囲気になってきたような感じだ。

「もういいです！それなら早く何処へと行っちゃってください！」

「わかりました。ところで・・・」

「なに？まだなんかあるんですか？」

「あのく、何処へと言われても・・・」

ゴンドラの周りに目を向けた。

その様子を見た3人も周辺の海を見回した。

「泳げます？」

「えー？」

なんて無慈悲なこと・・・

「藍華ちゃん？いくらなんでもそれはどうかと思うけど・・・」

藍華はほんとにこれでもかというほどの大きなため息をついた。

「はあく。わかりました。本当なら警察につき出してもいいくらいなんですよ？」

「ごもつともです」

「しようがないですね。じゃあ灯里？頼んだわよ」

「ええ？わたし？なに頼まれたの？」

「あんたが漕ぐの！」

「またあ？」

「またあつて。そもそもあんたがしっかりとロープの具合を確認してなかったことが原因でしょ？それにアリシアさんのゴンドラなんだから、ARIAカンパニーの社員である灯里が責任持つて扱うのが当然じゃないの？」

「言われてみればそうだねえ。確かに」

灯里はこちらのゴンドラに乗り移ると、倒していたオールを持ち上げた。

「あの、お名前をお聞きしてもいいですか？」

「アキラ・アサノです」

「アキラさん」

灯里はオールをしつかりと構え直した。

「灯里い？ちやつちやと済ませちやいましょう！」

「うん、わかったあ。じゃあアキラさん？少し揺れるので気をつけてくださいね」

座り直したおれを確認すると、灯里はグイツとひとかきした。

それは意外な印象だった。

背もたれに少し押しつけられるような感覚はあったが、思っていた以上にスムーズに動き出した。

その上、ゴンドラが海の上を滑るように進んでいく。

おれは思わず振り返ってその少女のにこやかな表情を見上げていた。

「何ですか？」

「あつ、いえ、なんでもありません・・・」

風が通り抜けていった。

彼女のピンク色の長い髪が揺れていた。

乱れたほつれ毛をそつと指でなぞる。

そんな仕草に、先程までとは違う印象を感じた。

まるで一瞬時が止まったようだった。

「はい、着きました」

彼女は、その優しい声でそう言った。

ほんの短い時間だった。

それは当たり前のことなんだが、なぜかこの時間が終わってしまうことが残念に思えた。

彼女たちとお別れは、目とはなの先にあつた建物に到着すると、そのちいさな船着き場から階段を上がっていった。

そこには、店内が見渡せるほどの大きな開口部と長くて広いカウンターがあり、そのカウンターのの上にはかわいらしい花を植えた小さな植え木鉢が置かれていた。

そこから見上げたもうひとつ上の階には「Welcome to ARIA COM  
PANY」と書かれた大きな看板が掲げられていた。

「ARIAカンパニーというのか・・・」

「じゃあこの辺で」

藍華はあつさりとした口調で言った。

「さすがに酔いは覚めましたでしょ?」

おれは改めてここに來た理由を思い返していた。

この少女たちとこのまま別れるのも仕方がないかと思つてみたが、考えたら右も左もわからないところでどうすればいいのか。

わかつているのはただひとつ、ここがあの女神アリシアーネが言ったネオ・ヴェネツィアという名前の未来都市だということ。

そこで第二の人生を過ごせという。

また命を授かったとはいえ、結構ハードルの高いテーマが待っているような気がする。

こういうときはセオリーでいってみるのがいいかもしれない。

「実はちよつと困つてまして」

「やっぱりお困りだったんですね？」

「だから灯里？ そうやってすぐ話を聞いちゃう！」

「本当なんです、藍華さん！」

「な、なによ！ いきなり馴れ馴れしい！」

「実は……」

ここはある程度本当のことを言つた方がいいかもしれない。

変に疑われたままよりかは、正直に話して事情をわかつてもらう方がこの目の前の女の子たちは理解してくれるように思える。

もちろん、そこは確信には触れずになんだけど……

「つまりそれって、傷心旅行ということですか？」

「まあなんといいましょうか・・・」

「憧れていた先輩に思いを届けられず、思い出のペンダントを胸にネオ・ヴェネツィアにやって来た」

「そんな感じだったか・・・」

アリスと灯里は、おれの話に少し表情が変わってきた。

それはまさに乙女の顔そのものだった。

「それって、恋に迷える旅人が、このネオ・ヴェネツィアを見守ってきた女神様の愛に導かれてやって来たみたいだねえ」

「恥ずかしいセリフ禁止!」

「はひっ!」

「あんたってほんとに相も変わらずねえ」

この灯里さんの言うこと、当たらずも遠からずなんだけど。

「ということなんですけど」

「けど?」

「しばらくここでご厄介になろうかと思ってる次第でして」

「厄介になるう? あんた! 変なこと企んでないでしょうね? このふたりは騙せても、この藍華・S・グランチェスタは騙されませんからね!」

「違いますうー!」

「何が違うって言うの?」

「教えて欲しいんです」

「何を?」

「ですからギルド」

「ぎるど?」

「生活をするとなると、まずは仕事が必要ですし、当面寝泊まりする宿も探さないといけない。近くには大概酒場があつて、そこで情報収集をやつて、できれば気の合うパーティーなんかが見つかればいいなあなんて考えてるんですけど・・・」

あれ?なんか雰囲気がおかしい。

変なこと言つたつもりがないのに。

異世界といえば、まずはギルドで冒険者登録をして、それから・・・

「パーティーってなんのパーティーなんですか?」

「だって勇者パーティー・・・でしょ?」

ちよつと待て。考えろ。

この感じは間違いなく場違いな発言をしたときのリアクションだ。でも間違つたことを言つたわけではない。



女神に会って、有無を言わず異世界に飛ばされて、そしたら剣を携えた冒険者たちがいて……いいない。いなかった！

そうだ！勘違いだ！ここは未来都市のヴェネツィア。しかもネオなんてつけちやつたりしてる！

ヨーロッパの街並みだったから、当たり前前に異世界もののパターンでやっていけばなんて考えてた！

おれはなんて安易だったんだ？

すると、とても冷静にアリスが話始めた。

「こちらの方は」

「アキラさんだよ」

「そのアキラさんは、お仕事を探していると言いたいんじゃないですか？」

「お仕事かぁ」

「そのパーティーの意味は分かりかねますが」

とアリスは前置きして「エヘン！」と咳払いをした。

「ネオ・ヴェネツィアにやって来たのはいいいけれど、いざとなると暮らしを考えなくてはならない。つまり、仕事と生活する場所が必要だと」

「なるほどお」

アリスの理解の速さと灯里の受け入れ態勢の速さで、救われようとしていた。

ありがたいなあ、この子たちは・・・

「あんたたちの言うことは理解できないわけじゃけど、なんか言ってることがおかしいのよねえ」

藍華さん？そこはとりあえずそのままスルーしてくれませんか？

「でもさつきこの人が言ってた『ぎるど』ってなに？」

「つまり職業紹介所のことなんじゃないですか？」

「どうなんですか？」

アリスさん！助かりますう！

「そうなんです！その職業紹介所です！・・・ふう」

「でも冒険してパーティーして、なんか楽しそうだねえ」

あ、あの、灯里さん？そこはもういいんですけど・・・

「ところでアキラさん？あなた、何か得意なことあるんですか？仕事を探すといつても何ができるのかで変わってきますよね？」

藍華さん？あなたの言うことはごもつともなことだ。そしてあなたは現実的な方で  
す。

このトリオがなぜ成立しているのか、わかる気がする。

でもそこではたと気がついた。

そうだった。問題はそこだった。

おれは過去に遡って異世界に行つたつてわけではなく、まだハッキリと分かっている訳ではないが、おそらく科学技術が発達した未来都市に来たはず。

あの女神アリシア・ネが言っていた、火星を開拓したという話が本当なら、とんでもない時代に来たわけだ。

じゃあおれのチート・スキルってなんなんだ？

こんな未来都市で発揮できるチート・スキルなんて、考えただけで恐ろしいぞ！

というか、そもそもチート・スキルが必要なかわからないんだけど・・・

現実的に考えて、おれができることと言ったら・・・

「猫探し、くらいかと」

3人は同時にキョトンとおれの顔を見つめた。

## 第4話 気さくなアリア社長

おれは灯里さんから手渡された地図を頼りに職業紹介所を目指した。

彼女が勤めるA R I Aカンパニーから少し歩き始めたとき、何気なく振り返った先で、灯里さんが猫の手を真似るような仕草をしながら「ニャ〜」と小声で呟くのが聞こえた。

彼女が何故そのようなことになったかは、もちろんこのオレに原因があった。

「猫のことならちよつとくらいならわかるかも……」

「ええー？アキラさんて猫の言葉がわかるんですかあー？」

その横でまやもや大きなため息をついた藍華が呆れたように言った。

「いったいなんなんですか？私がお聞きしたいのは、何か仕事に繋がりそうなことってありますかとお聞きしてるんですけど？」

そう言つて今度はその横で嬉しそうに微笑んでいる灯里さんの方を向いた。

「それにねえ灯里？あんたもなに？猫の言葉がわかるのおく？なんて言ったりして」「だつてつっきりわかるのかと思つて……」

すると今度は冷静にその会話を聞いていたアリスが口を開いた。

「もしかしてアクア猫ならわかるってことなんじゃないですか?」

「アクア猫ならあ?」

藍華とアリスは、じろりとおれの方に目を向けた。

「い、いや、というか、その先ほど言った先輩が猫を飼っていたもので、その猫とちよくちよく会っているうちに、なんかわかるような気持ちになつたというか・・・」

ふたりは同時に「はあく」とため息をもらすと、冷めた目でこちらを見た。

「でもちよつとわかる気がする」

灯里さんはふたりとは正反対に真顔だった。

「あんたねえ、またそんなこと言っちゃって・・・」

「ほんとだよ? アリア社長といるとわかつてくるの」

「何がわかるって言うの?」

「例えば・・・」

「例えば?」

灯里さんは伸ばした人差し指の先を顎に当てて考えた。

「例えばねえ・・・今朝のオムレツはちょうどいい固さだったとか」

「あ、あのねえ・・・」

「こないだなんて、洗濯ものを取り込むのを手伝ってくれたんだよ」

「誰に手伝ってもらってるの？あんたってひとは・・・」

「それならその後すぐに雨になって、さすがアリア社長ー！てなって」

「それってあんたじゃなくて、アリア社長の方がしつかりしてるって話でしょ？」

灯里さんはばつが悪そうに頭をかいた。

「エへへへ」

だがその後が悪かった。

ズングリムツクリとした白くて丸い物体がのっそりと近づいてくると、会話のなかに入ってきた。

「ふいにゆい？」

「なんですか？アリア社長？」

振り返った灯里さんはそれに答えていた。

社長？なんで？

ああ、わかった。あれだ。いわゆるマスコットのなやつだ。

灯里さんは少し膝を折るようにして、そのアリア社長とやらの笑いかけていた。

「お腹の具合でも悪いのですか？」

その様子にふたりが反応していた。



三人が一斉にオレの方に顔を向けた。

「えっ?なに?」

「オムレツ?」

「そうだったんですかあ〜?アリア社長?」

藍華は思わず突っ込んでいた。

「あんたはまた、なんでそこなの?」

「そこつて、どこ?」

「だからさあ〜、オムレツのことでなんか文句言ってるとか、わけのわからないことをこの人が言い出したりして・・・」

「柔らかすぎて物足りなかつたらしいですよ?」

藍華はまさに開いた口がふさがらないといった感じで、口をポカンと開けていた。

灯里さんとアリスも黙ってこちらを見ている。

「だからちよつと食べ過ぎたとか・・・」

聞き間違いではないと思う。

確かにそんな風に聞こえたんだが・・・

「アキラさんて、アクア猫の言葉がわかるんですか?」

灯里さんが驚いた顔で聞き返してきた。



「というか、まあ、わかるというのかなんというか……」

「まあ、わかるということをやっちまったのか？」

「あのアリア社長とやらが確かにそう言っていた……に聞こえた……はず。でも三人の驚きようはそうではないようだ。」

「つまり、聞こえてはいけけないものが聞こえた。ということになる。」

「どういふことなんだ？」

「オレは思わずアリア社長の方に目を向けた。」

「コイツ、冷静な顔して片手を挙げやがった。」

「やあー！」

「何が「やあー！」だよ……」

「やあー！」だつて？」

「アリア社長がオレに向かって少し微笑んで見せた。」

「それでアリア社長は、オムレツの固さがなんだといつてるんですか？」

「灯里さんはこちらの動揺も気にせず無邪気にたずねてきた。」

「ですから、柔らかすぎで物足りなかつたので、つい食べ過ぎたつて……」

「そうだったんですね。すみませんアリア社長！もつとアリア社長の好みを研究しない

とですすね！」

「あ、あのねえ……」

「またもや突っ込み役を担当している藍華が呆れていた。

そして冷静なアリスが続けた。

「あのー、先輩方？そもそもこのアキラさんがアクア猫であるアリア社長と会話が通じているということでしょうか？」

藍華が振り返った。

「ホントなんてですか？」

だがその横の灯里さんはアリア社長の方を見ていた。

アリア社長は自信満々で大きくうなずいた。

「ほらあ〜」

「何がほらあ〜よ！それが本当ならホラーよ！オカルトよ！」

「でつかいダジャレですね」

藍華は「なっ！」と言って口を開けてフリーズしていた。

ARIAカンパニーから少し遠ざかってから、オレはもう一度振り返ってみた。ドアのところから栈橋を渡ったところで、灯里さんはニツコリと笑っていた。

その足元にはアリア社長が手を振ってオレを見送ってくれていた。

それを見た灯里さんは胸の前で小さく猫の手の仕草を試みせた。

このふたりは・・・いい、いや、ひとりと一匹の中では、完全にアクア猫としゃべれる  
ひととして確定していた。

でもそれって喜んでいいのかどうか・・・

「アキラさん？仕事をさがすのなら、ちゃんとしたほうがいいですよ！」

冷静に忠告してくれた藍華の、なにかおかしなものを見るような、その疑いの眼差し  
が心にズキンと響いていた。

それに比べてあのふたり・・・いい、いや、あのひとりと一匹は。

これから先、どちらの反応を信じて行けばいいのか。

ちゃんと生活することを考えたら、藍華のことばがまっとうで正しい。

だが、灯里さんとアリア社長の笑顔には心が揺らいでしまう。

だって、聞こえたんだよなあ・・・

職業紹介所の中は思っていたよりも広々としていた。

テーブルがいくつも置かれていて、どのテーブルにも幾人かの人たちが座っていた。

奥にはカウンターがあり、そこで相談にのるといふ格好のようだ。

とりあえずどのカウンターへ行ったらいいかをわかることが必要だ。

だれか声をかけて聞いてみるのが手っ取り早いかもしれない。

事情がわからないところでは素直に誰かの助けを借りるもんだらう。

そう考えていると、偶然とはいえ適任といえる人と遭遇することになった。

白地にオレンジ色の配色だったが、灯里さんたちと同じデザインの格好をしている女の子が立っていた。

あれは確かアリスも着ていたか。つまりは同じ会社ということだろうか？

つまりはウンディーネ。

観光案内をしているということだ。

だがなんだか様子がおかしい。

明らかにあたふたしている。

目の前には男性がひとり。

そのウンディーネの身振り手振りがだんだんと大きくなってきた。

「あの〜その〜つまりですね？う〜ん、何て言ったらいいのか・・・」

なんとなくわかるのは、つまりはその男性はオレの先客のようだった。

彼女の格好を見て渡りに舟と思っただらう。

だが、たずねられた彼女は印象とは正反対のあたふたぶりが凄かった。少し近づいてわかった。

彼女はたずねられていることを把握できていなかった。

なぜなのかわからないが、そのことは理解できた。

男性はさつきから同じことを繰り返している。

「トイレはどこですか？」

なのに彼女はキョロキョロして困っていた。

「あの一」

なんか歯がゆくなってきたオレは声をかけてしまった。

そんなことに付き合ってる場合じゃないのに。

「はい？」

彼女は突然に声をかけられて、驚いて目を大きく開いてこちらを見ていた。

「わからないなら、ここのひとに聞いたらいいんじゃないですか？」

「それもそうなんですが……」

そう言いながら辺りを見回している。

「お忙しそうですねし……それに言葉がちよつとわかりづらいといえますか……」

「言葉？言葉ってどういうこと？」

「おそらくマンホームの、今ではあまり使われなくなった言葉ではないかと  
マンホーム？使われなくなった？

この人は何を言ってるんだ？

トイレの場所を聞いてるだけじゃないか？

男のひとの額から汗がにじんできていた。

お察しします。ホント。

「この人はただトイレの場所を聞いてるだけじゃないですか？」

ウンディーネの彼女はまたもや驚きの表情で目を大きく見開いた。

「おわかりになるんですか？」

「おわかりになるかって・・・」

そこでハツとした。

そうだった。

ここはネオ・ヴェネツィア。

まだよくわかっていない世界。

「よかったあ〜！」

彼女は顔を一気にほころばせていた。

「ところで、どこにあるんですって？」

急いで職員らしき人にたずねていた。

「またもやうかつにも反応してしまっていた。」

「オレが置かれていた状況をオレ自信がまだ把握できていないというのに。」

「反応次第ではどう思われるかわからない。」

「気を付けないといけないのに。」

「ありがとうございます。助かりました」

「彼女は恐縮して頭を下げていた。」

「いや、まあ、なんというか、助かったのならよかったです」

「ホントです！私も仕事柄いろんな言葉を耳にしますけど、先ほどの方の言葉はさすがにわかんなかったです」

「そ、そうなんですか・・・」

「もしかしてマンホームからいらしたんですか？」

「うーん、なのかなあ・・・」

「やっぱり！そうだと思います！」

「今このネオ・ヴェネツィアで観光案内をしているひとがわからなくて困ってしまう言葉。」

「それをなんの迷いもなくわかってしまうオレ。」

「というか普通に聞こえてたんですけど？」

「その時だった。」

少し離れたテーブルから呼び掛ける大きな声が聞こえてきた。

「あんずうー！なにやってんのー？」

彼女が振り返った先には、ふたりのウンディーネ姿の女の子がいた。

同じユニフォームを着たメガネをかけた女の子がこちらに手を振っていた。

もうひとりにはテーブルに頬杖をついて顎を乗せている。こちらのウンディーネのユ

ニフォームは見たことがあるような・・・

「そうだ！」

ふたりに向かって手を振っていた彼女は、振り返って突然そう言った。

「いいこと思いついた！」

「どうしたの？」

「時間あります？」

「えっ？時間？」

仕事はまだ見つからない男に、時間なんてたつぷりあるに決まっている。

いや、ない。

「ここへ何しに来たんだ？」



おい!

「まあ、ないわけでもないけど」

彼女のかわいい笑顔を見ると、つい反対の言葉が口から出ていた。

「ちよつと付き合ってもらってもいいですか?」

なんですとおー?

いきなりですかあ?

どういうこと?

目の前のふにやふにやしたかわいい笑顔に、仕事探しは明日からでつて心が命じていた。

「そうですねえ、あなたさえよければ・・・」

「ホントですか?」

「ホントもなにも」

「見つかつたよ～～!」

「見つかつたんですか・・・はい?」

彼女はその離れたテーブルに座っていたふたりに向かつて手を振っていた。

「あ、あの～」

「私たち、グループを結成するつもりでいたの。そしてゆくゆくは独立して会社を立ち

上げて……」

「ちよ、ちよつと待つて！何を言ってるの？」

「だからあ、観光案内会社を立ち上げて手広くやろうつて話」

「会社？手広く？」

「だけどひとつ問題があつたの」

「はあ」

「私たちあんまり勉強が得意じゃないの。だからやっぱり通訳を雇わないとつて話になつて」

「はあ？」

「でもすごいですよねえ？言葉がわかるつてやっぱりすごい！」

オレは彼女に手を引つ張られて、もうふたりのいるテーブルまで走つて行くことに。

「ちよつと待つてくれる？オレここへ仕事を探しに来たんだよ！」

そんなオレに彼女は立ち止まると振り返つてこう言つた。

「何を言ってるんですか？ここはネオ・ヴェネツィアですよ！心配いりませんから！」

オレの手を引く彼女の希望に満ちた後ろ姿とは裏腹に、その時のオレには心配しかなかつた。

なんなの！この子！

か  
わ  
い  
い  
け  
ど  
・  
・  
・

## 第5話 こじらせたシングルたち

「いい人見つかったよ！」

オレを無理やり引っ張ってきた、あんとと呼ばれた女の子は嬉しそうにそう言った。  
「あんと？ いきなりナニ？」

テーブルに座っているメガネをかけた女の子が不思議そうにこちらを見た。  
「だから言ってたじゃない？ アトラちゃん？」

「私が何を言ってたの？」

「もう！ こないだ言ってたでしょ？ ことばの問題のこと！」

「ああ、あの件ね」

「そう！ ソレ！」

「で？」

あんとはオレの方に手を向けてちよつと得意気になっていた。

「見つけたの。通訳のひと」

「え？ なに？ どういうこと？」

アトラは驚いてキョトンとしていた。

だがその横にいるもう一人のウンディーネ姿の男の子……じゃなくて女の子は、あ  
んずのことばに驚きつつも、少し呆れた反応をしていた。

「あのさあ、あんず？いきなり男の人を引つ張つてきたりして、一体なんなの？」

「だから今言つたでしょ？あゆみちゃん？通訳よ！ツ・ウ・ヤ・ク！」

「通訳つて……ホントに？」

あゆみという女の子はオレの全身を上から下まで疑いの眼差しで眺めた。

オレはといえば訳がわからないまま、その場で立ち尽くしていた。というか、立たさ  
れている気分。

「で、あなたは誰？」

あゆみの質問はごく当然のことだった。

「あ、あの、聞きたいのはこっちなんですけど？」

「えー？なにソレ？質問に質問で返すなんて反則なんじゃないですか？」

「だけどホントに訳がわからないわけで……」

「あつ、わかった。時給の交渉つてこと？いきなりそこ？ちよつとそれつてどうなの  
か  
なあ〜」

いきなり引つ張つてこられてなんなんだ？

しかもなんか時給の話になってる！

「そうよ、あんず？いきなりギャラ交渉する人ってどうかと思うわ」

アトラさんまで言い始めてる。

この集まりって一体・・・

「ちよつと待って。二人とも落ち着いて！今さつきそこで会ったばかりの人なんだから。いきなり時給がどうのって失礼よ！」

「でも通訳のひとって」

「あんずがそう言ったっしょ？」

「だからあ、それに適任の人がみつかったって話なの！」

ふたりは「なんだそれ」と無言ながら表情でツツこんでいた。

つまりこのあんずってウンディーネの女の子は、先程のトイレを探していた男性の言葉がすんなりわかったオレを見て、渡りに舟と言わんばかりに通訳に使えろと思っただけ。つまりは、その観光案内の仕事でってことのようなのだ。

「マンホームから来られたらしいの。私たちにはわからないマンホームの昔の言葉とか方言とかがわかるとなると・・・」

「なるほどね」

「なによ？あゆみ？なるほどって、どういうこと？」

アトラの疑問にあゆみは軽く咳払いをした。

「ここ最近マンホームからの観光客が増えてるつしよ？本家のヴェネツィアがちよつとあんな感じだし。その分だけネオ・ヴェネツィアに対する期待も大きいってことのようにだし」

「マンホームからのお客様はこれから益々期待できる訳じゃない？そう思わない？アトラちゃん？」

「つまりあゆみやあんずは、マンホームからのお客様の獲得は今後大事だということなのね？」

「そうゆうことー！」

あんずはようやく伝わったとばかりにニンマリと笑った。

だが三人のなかで話がスムーズに伝わったとしても、はいそうですかと当然聞ける訳ではない。

「あの一、つまりこういうこと？」

三人は一斉にこちらを向いた。

「三人は観光の仕事を自分達で始めようとしている。だけどそのためには言葉の問題がある。そうなると通訳が必要だと」

「そういうこと。あんた飲み込みが早いね」

あゆみが感心したようにそう言った。

「そこは聞いていればわかると思うけど」

「じゃあ決まりでいいですか？」

あんずは嬉しそうに応えた。

「あんず？いきなりは無理があるんじゃない？第一、この人がどういう人なのかわからないわけだし」

アトラが冷静に反応した。

「そう言われればそうなんだけど。でも私たちにはそう時間がある訳じゃないし……」  
なんとなくだが、事情があるらしいというのはわかってきた。

仕事を探しにやって来たおれにとつてもすぐに仕事にありつけるのは有難い話ではあるのだが、仕事になるかどうかともあやしい感じがする。

「あのー、聞いてみてもいい？」

三人の深刻な表情に、ちよつと気を使いつつも聞いてみた。

「おれは仕事を探しにここへ来たわけなんだけど、話の雰囲気からするとまだ始めてない訳だよな？その観光の仕事は？」

「そうだよ」

あゆみがあつさりと答えた。



「これからなんだよね？」

「だからそうだって」

「じゃあそもそも無理だよね？この話」

「まあ、そういうことになりますね」

「またもやあゆみはあつさりと答えた。」

「あゆみちゃん！そんなこと言ったらいつまでたつても始められないじゃない！」  
「そう言つたつて仕方ないっしょ？事実は事実なんだし」

あんずはあゆみの言葉にほつぺをふくらませて怒つた顔になった。

「それじゃあおれはこの辺で・・・」

「そう言つてその場から離れようとした。」

「えっ？帰るんですか？」

「いや、だって」

「なんで帰つちやうんですか？」

「なんでつて、この状況はそうなるんじゃないかと」

「ひどくないですか？」

「ひ、ひどい？」

あんずは批判的な顔で見つめ返してきた。

あゆみとアトラもなんだかこちらをおかしいことをしている人を見るような目で見返していた。

「わかりました。なんか事情がありそうなんです、もうちよつと聞きますよ。そこまで言うんなら。役に立つのかどうかわからないけど」

おれは諦めに似た気分のため息をついた。

そして空いていたイスに腰かけた。

それに合わせるように、三人が一斉にイスをひとつずつ横に移動して座り直した。

おれはまたもや大きなため息をつくはめになった。

「つまり、そのウンディーネには3段階の位があつて、あなたたちはまだ真ん中のシングルというやつなんですネ？」

おれのその確認で聞いたことばに三人は一斉にため息をついた。

「おたく、うちらにとつて聞きたくない話をよくもまあ言つてくれますね？」

「でもそう言ったのはそつちなわけで」

「確かにそうなんですけどね」

あゆみは頬杖をついておれをジロツと見返してきた。

「でも昇級試験は難しいし、なかなか先に進めない。おまけに試験管の先輩とはどうし

でもウマが合わない」と

「そういうネガティブなところは忘れてください！」

アトラが急いで否定してきた。

「まあとにかくなんにせよ、ここらへんで次にどう進むべきかを考えたほうがいいのはと、三人で話し合った結果、独立だとなったわけだ」

あんずはギクツとなつてまわりをキョロキョロ見回した。

「スミマセン。そこはデリケートなところなんで、もうちよつと声を落としてもらえませんか？」

「わかりましたよ」

三人は次なる一步を踏み出す決断をしていたところだった。

何故それを職業紹介所で行つていたのかは定かではないが、結構微妙な話を微妙なところでやつていたのは事実だった。

彼女達三人はここネオ・ヴェネツィアで観光の仕事をウンディーネという職業で続けてきたわけだった。一人前のウンディーネ、つまりプリマになつて仕事をバリバリやることを夢見ていた。だがそこにはどうしても越えられない高い壁があつた。そういうしてうるうちに、年齢と将来のことが頭をかすめるようになってきたわけだった。

もしシングルのままだったら・・・

「うちはどっちでもいいんだけどね」

あゆみはアトラとあんずとは少し考えが違うようだった。それゆえにふたりと少し温度差があった。

だが、なんか面白くなるんらという条件でふたりの話に乗ることにしたという。

「そこで三人はこれまでの経験を生かして、観光業に打つてでようとしたわけ?」

「そこはやっぱ観光でご飯を食べてきたわけなんだから、そうなると思うのよね」

「私もアトラちゃんのいうことに賛成なの。それにこれからネオ・ヴェネツィアはなんか色々始めるっていう情報も手に入れたしね♡」

「なんか色々って?」

そこにあゆみが口を挟んできた。

「それ、どこまでほんとかわからないからね」

「だってこの前、親しい常連のお客さんから聞いたって、あゆみちゃん言ってたでしょ?」

「聞いたよ?確かに聞いたけど、市場のカボチャ売ってるおばちゃんの話だからね」

「でも事情通だつていつてなかった?アリスちゃんのネオ・ヴェネツィア国際映画祭のプレゼンターの件も、オレンジぶらねつとにいる私たちより先に知ってたでしょ?」

「確かにそうだったけど」

二人の会話が落ち着いたところで聞いてみた。

「それって、観光業に打つてでようとした理由が他にもあるということ？」

「エヘン！」とあんずは咳払いをして見せた。

「よくぞ聞いてくれました！つまり本題はそこなんです。私たち、何も無謀な賭けに出ようとは思ってません。ちゃんと根拠があつてのことなんです！」

「はあ」

なんかすごい自信ありげだなあ・・・

「いいですか？なんとですよ！このネオ・ヴェネツィアがですよ？新しく生まれ変わるって話なんです！」

あんずは一段と目を輝かせて言い放った。

「ちよつとあんず？それってまだ決定した話じゃないんだからね」

あゆみがあんずは釘を刺すように口を挟んだ。

「でもこんな話、聞き逃すわけにいかないでしょ？しかも私たちには絶好のチャンスよ。これを逃す手はないわ！」

その反応を見てあゆみは大きくため息をついた。

「やっぱり言うんじゃないか。次期早々とはこういうことなんだろうなあ・・・」

二人の様子を見比べていると、やはりそこは聞かないわけにはいかない。

「あのー、つまり、どういうこと？」

「よくぞ聞いてくれました！」

「二回目だ」

「何回でも言いますよ！」

「とりあえず一回で結構です」

「そんな遠慮しなくても」

「あの・・・」

「エヘン！」

あんずは仕切り直した。

「題して、ネオ・ヴェネツィア夢ランド計画うー！」

「なんだ？夢ランド？それってテーマパークでも立ち上げるつもりなのか？しかもネオ・ヴェネツィアとも言ってる。」

「まだネオ・ヴェネツィアのことすらちゃんとわかっていないおれからすると、なんのことがすらピンとこない。いったいどうしたもんか・・・」

「スゴいでしょ？」

「スゴいと聞かれても・・・」

「ええー？わかんないんですかあ？」

「だっておれは最近・・・というか、来たばかりだから、ここへは」

「来たばかり？」

「そうですけど？」

「そうなんですかあ？」

あんずはホントに驚いておれの顔を見ていた。

「それじゃあダメじゃないですかあー！」

「ダメ？何が？」

「観光案内ですよ！ネオ・ヴェネツィアのこと、詳しくない人が案内なんて出来ないじゃないですかあー！」

おれは今怒られている。怒られているよね？確かに怒られているよね？なんで怒れないきやいけけないの？

「あ、あの、あんずさん？なんでおれが怒られなきやいけけないの？無理やり引つ張つてきたのはあなたであつて・・・」

そこであゆみは大きなため息をついた。

「だから言わんこつちやない。こんな訳のわからない人をいきなり連れてきて通訳だと言つたりして」

「訳のわからない・・・」

開いた口がふさがらなかつた。ホントに。

だが無邪気に話す三人はわかつてなかつた。実はこんなところで話す内容ではなかつたのだ。

あんずのいったネオ・ヴェネツィア夢ランド計画は、必ずしもオーバーな話ではなかつた。

そもそも夢ランド計画って、なんのこつちやわからない話なんだが、実のところ秘密裏に進行している話が、ここネオ・ヴェネツィアには本当にあつた。

三人はそのことに触れる話だとは思つてなかつた。

「なぜあの三人が知ってるの？」

少し離れたテーブルに座っていた女は、その場には全くといっていいほど似つかわしくない大きなつぼの帽子に真つ黒のサングラス姿で経済新聞を広げていた。

その新聞で顔を隠していたが、隠せるわけもないほどの出で立ちで、あんずたちの方に聞き耳を立てていた。

「いったいどこから漏れたの？ チョーチョー機密情報だというのに・・・」